2019年
1月号

“枠”のない場所

昼間は静かな民家になじんで、この長屋の一角が店とは気づかない。夜になると、ぽっと浮かび上がる灯り。扉を開けると、人通りの少ない道路から一変、電球色のあたたかな空気に包まれる。1階では料理がふるまわれ、2階へあがると、ごろりと寝ころびたくなるような空間が広がっている。ずらりと並ぶ漫画は、こだわりぬかれたもの。つい自分だけの時間に没頭したくなる。

店主である杉田さんが友人と2人でスタートさせたこの場所は、当初から定義もカテゴリーも設定していない。ただ、なんとなく“そこには漫画があって、人が集まれる場所“ということだけは漠然とイメージしていたそう。二人で歩いていて、たまたま見つけた築数十年のこの物件。飲食店としてすでに一度リノベーションされていたことと、オーナーからの、「家が壊れない限りは好きにしていい」の言葉が決め手だった。

建物の土台や間取りはそのままにしたものの、壁全面にモザイク模様に貼った板、大型の漫画棚、流しのタイル、これらは何の建築の知識も持たない数人が「思いつき」を頼りに、3ヶ月の時間を要し作り上げたもの。

時には、建築関係の知り合いからアドバイスを受け、YouTubeでやり方をまね、手探りの日々だったという。そう話す杉田さんの表情からは、それが刺激的で楽しい時間であったことが見て取れる。

北海道の先端から沖縄まで、一つの場所にとどまることなく、経験してきた仕事は50を超えるという。常に変化を求め自由な生き方を望んでいるのかと想像するが、そんな杉田さんが、この店を構え3年目を迎えた。この場所には、いろんな人が入れ代わり立ち代わり来て、“自分が好きなこと”を持ち寄る。それを、その日ここに来た人と共に楽しむ。そんな会が毎週のように繰り広げられている。「1つの場所に居ながら常に新しい景色を楽しんでいる」と話す姿に、気負いはまるでない。自然に身を任せるように、変化していく店を、店主でありながらお客と共に楽しむ。枠にはまらず、店はこれからも新しい景色を見せ続ける。

2019年
2月号

ものづくりへの一途な思いが“形”となった場所

疎開道路から桃谷商店街を折れ、少し入ったところに、白い木枠が印象的なガラス張りのお店がある。扉を開くと、賑やかな商店街から一変、別世界に入り込んだ錯覚に陥る。天井から吊るされたいくつかのペンダントライトが、布の鞄や、ニットの小物、季節を感じさせる雑貨たちを、柔らかく照らしている。

ここは店主である田口さんが5年前に開いた雑貨店。1階のキッチンと2階はリフォームされていたが、店舗部分は何もない空っぽの空間だった。「自由に手をいれていい」と言われたことと、昔ながらの店の中に新しい店もでき始めていたこの商店街に可能性を感じたことからこの場所に決めた。

店の中央に位置する大きな木のテーブル、それを囲む椅子。落ち着いた色の木の床が広がり、白壁の中、一面だけ深いグリーンの壁を彩る白木の飾り窓。そしてお店の象徴であるガラスの扉。これらは全て田口さんが思い描いていた世界そのもの。ひとつひとつ自分のイメージを形にするように、プロの力を借りてリノベした。照明にもこだわりが。デザインに惚れ込んだものをひとつずつ増やしていったというペンダントライト。あちこちに飾られたプリザーブドフラワーやアーティフィッシャルフラワーが、きれいに見えるようにと、あえて光の量を落としている。

幼い頃からものをつくることが好きだったという田口さん。母が洋裁の先生だったこともあり、小学生になる頃には自分の服を作り始め、当たり前のように洋裁の学校へ進んだ。

そんな時、ふとしたきっかけで知った着物の世界は、新鮮で魅力的に感じた。着付けを学び、講師としても6年ほど勤めた。今飾られているカバンやヘアアクセサリーは、様々な柄の着物地が、田口さんの自由な発想で組み合わされデザインされ、作り上げられたもの。洋風の店内と見事な調和を見せている。他にも、手編みの帽子や皮製のヘアアクセサリー、フラワーアートなど、田口さんが手がけるものは幅広い。

雑貨だけでなく、フラワーアレンジ教室や素材からこだわるランチの提供も始めた。「いつかピアノの演奏会もしたい」とこの場所で咲かせたい夢は続く。田口さんのものづくりに対する真摯で丁寧な姿勢が人を惹きつけている。

2019年
3月号

“真っ直ぐな思い”とともにある場所

この通りで多く目に映るのは、空き家や工場の跡。かつては町工場がひしめき合い、行き交う人たちで活気があったことがうかがえる。東中川地区の一角。平野川にほど近い細い路地にある長屋の一番奥に、高山さんのお住まいはあります。

グレーのシックな外観と広いベランダ、大きなガラス戸の玄関が印象的です。

1階を中心にしたリノベーション。玄関の扉を入ってすぐの部屋は、床をはがしコンクリート敷きの土間に。そこに、キッチンを備え、東向きの窓から入る光が、気持ち良い空間にしてくれています。土間から一段あがったところには、高山さんがヨガ教室として使用されているスペースが広がっています。音や振動を気にしなくてもいいようにと、隣家との間の壁には防音壁を、床材には、人が跳ねても響きにくい体育館と同じ素材のものを取り付けたのだそう。さらに、お風呂がなかったので、部屋の一番奥にはにシャワールームを設けました。

5年間ヨガのインストラクターとして働いていた高山さんは、ここでヨガのレッスンをされています。ヨガスペースの壁は柔らかなピンク色。ヨガで使用するハンモックもピンク色。「ピンクは胎内と同じ色なんです。母親のお腹の中で見ていた、本能的に落ち着く色だと知り、安らぐ環境でヨガをしてもらいたくて、この色にしました。」と教えてくれました。

一度改装はされていたものの、築80年のこの家を見たとき、「5年も空き家だったのに、昨日まで人が住んでいたかのように手入れがされていて、なんだか温かいものを感じて、人を癒す場にぴったりと思った」のだそう。

今のお住まいと出会われたきっかけは、区内で開催されている“空き家カフェ”への参加。学生時代のひきこもりや、転職を繰り返してきたご自身の過去の経験から、“ヨガで人を癒したい”そんな気持ちが強くなってきたころ、知人から空き家カフェを紹介されたそう。高山さんの夢に共感した、カフェに集まる専門家たちや大家さんをはじめ、多くの人の支えがあったから今の場所があると言います。

心や脳、体に関することを10年以上かけて学び、本当の自分を探すように生きてきた高山さん。「今後は、誰にも相談できずに悩んでいるこどもたちや、発達障がいで生きづらさを感じている人たちをヨガでサポートしたい」と話されるお姿からは、優しさと真っ直ぐな生き方が感じられます。